

オレンジティ定例会
「里親・養子縁組支援を知ろう7」
座談会記録

発行

認定NPO法人 オレンジティ(理事長 河村裕美)

オレンジツリープロジェクト×オレンジブロッサムカフェ

2026年2月

もくじ

はじめに

座談会で語られたテーマ

— 2025年3月に開催した座談会での主な話題 —

座談会の語り手の紹介

座談会の記録

オレンジツリープロジェクトについて

意見交換

座談会を終えて、参加者からメッセージ

はじめに

若くしてがんを経験したあと、「子どもをもつか、もたないか」「家族をどう考えるか」という問いに向き合うことがあります。その問いの答えは、それぞれの中にあります。病気の経過や年齢、パートナーや家族との関係によって、気持ちは揺れ動き、変化していきます。この座談会で語られている言葉もまた、語り手や参加者それぞれがその時点で置かれていた状況や思いの中で語ったものです。2025年3月、オレンジツリープロジェクトでは、若年がん患者のための交流会「オレンジブロッサム Café」とのコラボレーション企画として少人数制の座談会を開催しました。

オレンジツリープロジェクトは、オレンジティの里親・養子縁組支援活動です。冊子「家族がふえたよ」を作成するとともに、オレンジツリー相談室を開設し、がんなどの治療によって子どもをもつことが難しくなった方や、その周囲の人が、「子ども」や「家族」について安心して話し合える場を継続的に設けてきました。本記事は、特定の選択を勧めるものではありません。語られた経験や迷い、考えの「プロセス」そのものを共有することで、がんを経験された人や支援する人が自分自身の価値観に向き合うための一助となることを目指しています。

座談会で語られたテーマ

— 2025年3月に開催した座談会での主な話題 —

シーン1 身近な家族と、考えや気持ちを話し合うこと

シーン2 家族のかたち・親や周りの人たちとの関係

シーン3 子どもを迎え、育てること

シーン4 オレンジツリープロジェクトの活動や考え方

座談会の語り手の紹介

司会

河村裕美(子宮頸がん経験者)

認定 NPO 法人オレンジティ理事長で、オレンジツリープロジェクトの企画者です。20 代で結婚後、まもなく子宮頸がんの診断を受けました。治療と向き合うなかで、子どもをもつことや家族のあり方について悩み、考え続けてきました。現在は、里親・養子縁組という選択を通じて子どもを育てています。社会福祉士としての専門的な視点も生かし、本座談会では司会を務めました。

語り手4名

Aさん(子宮頸がんの経験者)

子宮頸がんの経験者です。24歳でがんの告知を受け、ステージ1B2で手術を受けました。その後再発し、ステージ4相当の診断となりましたが、治療を受けてもうすぐ10年となります。現在は、がんを経験した後に知り合った方と結婚して、夫と2人で暮らしています。

がんになる前から、自分が子育てをできるのかという不安を抱えていました。里親や養子縁組の勉強会に参加したことで、少しずつ自分の気持ちを話せるようになりました。

がんを経験した後、子どもをもつことについて考えたとき、自分のお腹で育てることができないことに対する安心と、一般的な人生を歩めなくなったという思いが、同時にありました。新婚当初は年に一度、話し合う機会を作っていましたが現在はしていません。

Bさん(乳がんの経験者)

乳がんの経験者です。38歳で未婚・パートナーなしの状況で診断されましたが、判明時には進行していました。現在は局所再再発治療中で、ステージ4相当として治療を続けています。今は家族と2人で暮らしています。

これまで、結婚や子どもをもつことを意識してきましたが、治療の経過のなかで再発が分かり、「もう難しい」と感じるようになりました。

現在は、子どもや結婚についての選択肢は限られていると感じつつも、婦人科の治療で体調を整えながら、より良く生きることや、女性としての生き方を模索しています。オレンジツリープロジェクトを通じて、家族の成り立ちについて母や姉と話し合う機会を得られたことを、大切に感じています。

Cさん(重複がんの経験者)

重複がんの経験者で、30歳のときにいずれもステージ1と診断されました。現在は、夫と娘の3人で暮らしています。

結婚する前は、子どもをもつことを想像しておらず、「30歳まで生きているのだろうか」と感じていました。29歳で結婚した際に、不妊治療を始めましたが、その過程でがんが分かりました。

不妊治療のなかで特別養子縁組や里親制度を知り、夫と話し合ったうえで、里親登録を行い、特別養子縁組を通じて子どもを迎えました。その後、子どもが幼いときに別のがんが見つかり、現在も経過観察を続けています。

Dさん(医療従事者)

病院の女性診療科での看護師経験があります。結婚して11年目になり、現在は夫婦で暮らしています。子どもが好きで、家にいることや育てることに特に抵抗はなく、むしろ前向きな気持ちをもっています。

40歳を迎え、夫婦での生活が安定してきた今、これからも二人の生活を続けていくのかなと考えることがあります。夫と話す中で「いなくてもいいかもしれない」という意見が出ることもあり、時々「今はどう？ 子どもが欲しい気持ちは？」と気持ちを確かめ合っています。

座談会の記録

【身近な家族と、考えや気持ちを話し合うこと】

司会)Aさんから一年に一度、話をするという話が出ました。確かに、毎年確認することが相手に負担になるかもしれません。パートナーとの関係構築や、お互いの決定が確かであれば、必ずしも確認が必要ではないのかもしれませんが。

オレンジツリープロジェクトでは、相手の気持ちが変わることもある、という点を伝えていきます。特に20代から30代は、周囲の環境も変わり、友人の子どもなどと一緒に遊ぶ機会が増えて、「自分も欲しくなった」と感じる人もいます。ところが、50代になってから「実は欲しかった」と言われ、「どうしてその時言わなかったの?」ということもあるんですね。

お互いを思いやるあまり、決定を明確にしないままになってしまうケースもあります。だからこそ、毎年確認するというのは、一つの提案として考えています。どう思いますか?

Aさん)何かきっかけがあった時に、確認するのはいいのかもしれないと思います。その時のお互いの環境や精神状態にもよるとは思うんです。話がしやすい空気もあって、そういう時に聴けるといいなと思っています。さらっと確認することではないかもしれませんが、その話を聞いていて、私たちはこういうことに向き合うのが苦手なのかもな、と感じました。

Dさん)すごくよくわかる話ですね。家族だからこそ、繊細な話になりますよね。簡単にご飯を食べながら話せるようなものでもないし、かといって改まって話すのも緊張しますし。でも、「気持ちが変わることがある」ということは、よくわかっておかないといけないと思います。

例えば、うちでは20代前半で「子どもはいらない」と言っていたけど、30代になって友人に家族がふえてきたこともあって、「6割くらい欲しいかも」と思うようになっていました。それでもどうしていくかということに話を具体的に進めるのは難しく、離れて暮らしていた時期もあったので余計にそうだったかもしれません。「特別養子縁組について考えたことある?」と話してみたこともあったけど、「自分の子どもとして思えるかどうかわからない」と言われたこともありました。その辺の価値観の違いもあって、家族を作ることの難しさを感じます。

司会)そうですね。それは話し合いとしてきちんと成立していると思いますし、自分たちの中で納得できていれば良いのではないのでしょうか。血縁を大切にする考え方もあるし、社会的なつながりを大事にする考え方もあります。

それぞれの価値観なのだと思います。

【家族のかたち・親や周りの人たちとの関係】

司会) 家族との関係についても、お話を聞きたいのですが、Cさんは、ご両親との関係はどうでしたか？

Cさん) 両親は亡くなっていたので、特に問題はありませんでした。ただ、義理の両親とは、最初は普通養子縁組のイメージがあったのか、「優れた子が来たらいいよね」みたいなことを言われて、違和感を覚えたこともあります。

私も夫も、血縁関係よりも社会的なつながりや、自分が親から教わったこと、思い出みたいなものを伝えていけるといいよねという価値観で、そこは共通していました。でも、義理の両親からの「優れた子が来たらいいよね」という言葉は、今でも少し引っかかっています。司会の河村さんがおっしゃったように、赤ちゃんを迎えて、一緒に遊んでいるうちに、「家を守ることが大事」という価値観からすこし変わっていったように思います。

司会) 私の両親も当初と随分変化して、「血よりも育てることが大事だよね」と今は言っています。時間をかけて理解してもらえたんだな、と思っています。血縁を大切にという考えを持つ人は、まだ多く、オレンジツリープロジェクトの相談の中でも、「血のつながり」「遺伝子」という話題がよく出てきます。

海外と比べても日本は血縁へのこだわりが強いのかなと思います。昔は養子縁組が一般的だったわけですが、その価値観を変えていく必要があるのかもしれない。

Bさん) 私が罹患した時には父は亡くなっていて、家族は母と姉の3人でした。結婚や恋愛について話す機会はあまりなくて、田舎なので「早く結婚しなさい」みたいなことはあっても、深く話す機会はなかったです。

恋愛の話題は普段は会話の中になく、気づけば、30歳を超えて、40歳になり、結局50歳が近づいてくるという状況になるので、さきほど50歳を過ぎてから、本当は子どもが欲しかったんだ、という方の話もありましたが、先延ばしにしていたら、ほんとにそんな状況になっちゃうかも…と思いつながりながらお話を聞かせてもらいました。

【子どもを迎え、育てること】

司会)私のケースでは、子どもを0歳で迎えました。折に触れ、言葉がわかる前から「生物学上の母ではない」と伝えて続けてきました。本人も今では産んでくれた父母がほかにいて、私たちは育ての親ということ、普通に、言葉を覚えるのと同じように理解しています。

ただ、周りの人がどう思っているのか、気になることがありました。

友人、学校の人たちなど、親族とは違うところで、どのように伝わるか。田舎ということもあり、地元の小学校では、うちの事情がすぐに広まってしまうだろうな、と考えて結局、少し離れた私立の小学校に入学させました。いいことか悪いことかと悩むこともあります。結局この選択が正しかったと思うようになっています。

Cさん)私も同じです。子どもを私立に入学させました。同じような意図で、長期的な友人関係を築くことで、家庭の背景を気にせずに育てられる環境を想像しながらの選択でした。

この選択がどうなのか、この後10年たつと見えてくるかもしれないのですが、司会の河村さんのお話しになるほど、と思って聞いていました。

司会)いまの学校は私立なので、様々な人が通ってくるので、家庭環境が反映されないという感覚があります。こどもが小学校の上級生になって、やっぱり地元の学校に行かせなくてよかったと思っています。

お祭りの太鼓の練習とかで地元の子たちと交流する機会がありますが、もし地元の学校に通っていたら、周囲の目が気になって大変だったかもしれません。この選択で今は良かったと思っています。

Bさん)私の親は、戦争で父親を亡くし、近い親族の子どもとなりましたが、本人には伝えられずに育ったと聞いています。

小学校に行く途中で周囲の方から「もらわれた子なんだね」と言われて悟ったということ話をしていました。田舎には、そのような周りとは違うことに、近所や周囲の目が向いてしまうということは実感しています。

司会)日本には橋の下伝説っていうのがあって。で、子どもの頃に、みんなお前を端の下から拾ってきたんだよっていうふうに言われて子どもが泣くという話です。

この思想は、もらわれる子どもは悪で、家の中で肩身が狭いというような価値観で、これを子どもころから植え付けられてしまうということがあります。私自身も言われたことがあります。そのような話をする事で、子どもに対する価値観、イメージを悪い方向で植え付けられてしまっているように思います。

支援の中でも私たちがしばしば感じる、婦人科がんに対する偏見と同じように、社会の批判的な見方を是正していくために声を大きくしていけないと思っています。

オレンジツリープロジェクトの活動や考え方

Cさん)オレンジツリープロジェクトのイベントとして、2018年3月静岡市にて初めて開催された「第62回定例会・若い世代のがんサバイバーの皆さんへ」に参加したことを覚えています。ちょうど治療が終わって、まだ髪の毛が生えていなかった頃に、静岡まで新幹線で行きました。

選択肢の話が出ましたが、「選択肢がない」というのが一番辛いことだと思います。こういう場が、その選択肢を考える機会になるのかなと思います。7回目となる今回も、続けていただいていることに感謝しています。

Dさん)遠方の静岡まで行こうと思ったのは、やはりそういう場がなかったからですか？

Cさん)なかったです。治療した病院では、「次はどうすればいいんだろう？」と相談したくて、相談支援センターで話しても、新聞に載っていた情報を紹介してもらう程度で、頼りに相談所に連絡するくらいしか手段がありませんでした。そんな中でオレンジツリーの案内を見つけ、「行けるなら行ってみよう」と思ったのがきっかけでした。

Dさん)あの時はAYAをテーマにした定例会で、いろいろな企画の中で、オレンジツリープロジェクトを取り上げたと記憶しています。里親養子縁組の情報を知るか知らないかはとても大きな違いです。

意見交換

この座談会では、「語り手」4名のほかの参加者の方からも意見や感想をいただきました。

以下の本文では、発言の内容に応じて立場をわけて表示しています。

司会)里親自体が、子どもをもてないことによる選択肢ではなく、児童福祉の一環であることを理解してほしいと思います。

私が以前、ケースワーカーとして関わっていた児童相談所で話をすると、「不妊治療に失敗したから養子を迎える」という考えを持つ人もいて、そういう人がマッチング¹されても、結局「思っていたのと違う」と言って 8 週間ほどで子どもを返してしまうケースもありました。

子どもは、大人の自己実現のための存在ではなく、児童福祉の中で考えられるべきで、私たちがその福祉の中に関わる一部であるというだけの話なんです。

実際に、患者さんも、特に治療を終えたばかりの方はすごく焦っています。「子どもが産めなくなったことで、夫に迷惑をかけているのではないか」「子ども好きの夫のために、何とかしたい」と考えて、すぐに里親登録をしようとする人もいます。

でも、その気持ちは経験からも痛いほどわかるので共感しつつ、子どもは「自己実現のための存在ではない」と伝えることが大切だと思っています。何かしたいなら、まずは保育士の勉強をするのも一つの手です。実際に、それで本当に資格を取得した方もいて、保育士になってみたら、「こういう関わり方、仕事を通じて子どもと関わることもいいな」と気づかれた方もいました。

参加者1)結局、「なぜ子どもが欲しいのか？」という意思決定をする際のサポートが重要ですね。医療者や支援者が、その判断をもっと丁寧にサポートする必要があると感じます。

自分の実現のためや、結婚生活を維持するため、周囲の目を気にするために里親を選ぶことは、本来の自分の目的とは違うかたちかもしれません。

自分自身も葛藤したところでした。

¹ マッチングとは、子どもの状況やニーズと、里親や養子縁組を考える家庭の希望や環境を丁寧に照らし合わせながら、双方にとって無理のない関係づくりを検討していく過程のことです。すぐに決定されるものではなく、話し合いや準備の時間を重ねながら進められます。

まずは自分の価値観を、そして相手と共有できるか、本人たちがつらくなく支援ができるように、そこをもっと明確にできる場があればいいと思います。

病院で情報提供するときにも、里親養子縁組がある前提で、発信するのは危険だということも理解できます。

参加者2)知識を持つことはもちろん大切ですが、「なぜそうしたいのか？」を考えることが本当に重要です。でも、それを言葉にするのは難しいし、他者と共有するのも難しいことです。

当たり前だと思っていた価値観に気づき、怖いと感じていることや不安に思っていることを整理することが大事ですね。選択肢について具体的に話す場が、いまはオレンジツリープロジェクトにしかないように思います。

参加者3)いろいろ話してきたからこそ、言葉にできるようになったんだと思います。「そんなに子どもが欲しいとは思っていなかったかもしれない」とか、「実は親がこう言っていた」など、もともと持っているものをきちんと話せることはとても大事ですね。

経験した方たちのお話し、子育ての苦労や大変さも含めて、話し合える場、選択肢について考えられる場になれば、さらに良いのではないのでしょうか。

オレンジツリープロジェクトがそういう場になれるといいなと思っています。

正解はないし、子どもがいるから幸せだという価値観だけではない。自分が一人になったときにどう生きていくかということも含めていろいろな視点を含めて話せるといいなと思います。

司会)医療者の介入で里親養子縁組の選択肢を与えられると、「すぐに里親になれる」「簡単に養子を迎えられる」と誤解されることがありますが、実際には、福祉の中でしっかり判断されるものです。

里親の登録にあたり、公的な機関では福祉の現場にちゃんとスクリーニング²があるので、医療で深く関わるより、福祉に任せるほうがいいと思います。

² スクリーニングとは里親や養子縁組を考える家庭と、子どもとのよりよい出会いにつなげるために、家庭の状況や希望、準備の状況などを確認する過程のことです。選別や可否を決めるものではありません。

福祉には蓄積があり、専門家につなぐことが最適だと思います。医療側でできることは、「福祉の現場ではこういう質問をされる」「こういうことを考えておく必要がある」という心構えを伝えることくらいです。聞きたくないことも聞かれる。

例えば、再発したらどうするか、親として先に亡くなってしまったら他の家族は子どもを育てられるのかというようなことも現実に関われることがあります。

参加者1) 里親登録を公的機関でしたあとに、民間に複数行ってみたのですが、「がんですか、10年後に来てください、その時に元気だったら。」と言われるようなこともありました。会話する中でショックを受けることもあったし、いろいろ思うところはありませんが、大前提として子どものための社会福祉ということですね。

話し合いややり取りのプロセスを経て、自分や家族が自己決定によってどうなるのか。自分とは何なのかということを考える機会でした。それは今も続いている気がします。

司会) オレンジツリープロジェクトを進める中で、社会福祉としてとても大事にしているところですよ。

自分や、家族ということに対する考え方を整理してもらい、気づいてもらうということは重要です。

自分のエゴで子どもが欲しいということではなく、自分自身のことに気づいてもらう過程があります。辛いことがあっても、そのプロセスが必要な場合もありますね。また子どもが来た時にどうしてもうまくいかないときもあって、そういった場合の受け皿も福祉にはあるので、医療ではなく福祉に任せるほうがよいように思います。医療現場が頑張りすぎても、妊孕性の問題から里親を紹介することで何か解決するわけではないと思います。

参加者4) 医療から社会福祉につないでほしいし、オレンジツリープロジェクトとしては間をつなぐ存在として経験を伝えたり、さまざまな価値を伝える工夫が必要かもしれないですね。いろいろな選択肢があるなかで、意思決定を支えるという重要な役割が患者会にはあり、またそのような場であってほしいと思います。

座談会を終えて、語り手からメッセージ

A さん)今日はありがとうございました。いろいろな価値観を持つ人が集まる中で、「違うよね」と否定されることなく話せる空気があって、自分の考えを素直に話せました。

自分と向き合うことは時に苦しいこともたくさんありますが、こういう場があることで、そのプロセスを支えられるのは本当に大事なことだと感じました。家族との話し合いの時間も、もう少し意識して持ちたいなと思いました。

B さん)いろいろな価値観をもつ人が集まって話し合う中で、正解や間違いはなく、自分が思ったことを素直に話せる場だなと思いました。自分と向き合うだけでなく、制度を知った上で向き合うことが大切だと思います。

苦しいこともたくさんありますが、自分の考えをもつ手段として、知識を取り入れていくために、こういう学びの場があることはとても大事だと思いました。家族と話し合う場も引き続き設けたいです。最後に、家族の形は経験上、周囲の心ない声はあっても自分たちが『家族』と認め合っていれば良いのかなあとと思います。

C さん)とても良い機会になりました。がんを罹患して、考えないといけないことがたくさんあって、自分のことを深く考えるようになっていきます。がんのリスクを考えながら暮らしている中で、自分のことを考え続け、意思決定の連続の中で、子どもを迎えることは転換点の一つでした。

役割が変わっていくこともあって、自分自身の判断がアップデートされていくのを感じました。こういった場での話し合い、安全な場所で話し合える機会があるのは、大事だと思います。

以上